ダライラマ 13 世 (1876–1933) の宗教政策

—— 仏教振興策とその要因 ——

浅井 万友美

1 はじめに

(1) 問題の設定

20 世紀半ばに中華人民共和国の勢力下で変革が行われるまでのチベットは「政教合一」の体制であり、そこにおいてダライラマは政教二元の長の役割を担った者とされる。しかしチベット近代史、中でも今回取り上げようとしている 13 世代の研究において、宗教面の事績はあまり注目されてこなかった。13 世をとりあげた研究の多くが、軍事や教育などの近代化の試みとその不成功を強調している (Goldstein 1989; Tshe ring 1992)。一方で 13 世を歴代ダライラマの中で 5 世と並び偉大な人物だとする見方もある (Dondup 1986)。このような一見矛盾する評価があるのはなぜか。それにはダライラマの政治上の役割のみに注目していることが、理由の一つとしてあるのではないかと考えられる。そこで本論文においては、13 世の宗教面での業績から 13 世の治世の特徴を考えてみたい。

13 世がチベットの舵取りをした時代、その周囲の中国やインドにおいては近代化が進められつつあった。西欧列強の領土・経済的野心に飲み込まれないための自衛策として、それは切実な必要性和必然性に後押しされ行われていた。両国にはさまれたチベットでも、約 2 世紀ぶりに領内から中国勢力を排除し事実上の「独立」を達成することで国民国家成立の契機が準備され、またインドとの境界近くに設けられた交易市場等を通じて資本主義経済と通じ、さらには 13 世によって軍事や産業、教育をはじめとする多分野での改革が行われていた。その多くは成果を見なかったが、これらはチベットを近代化させることを目的に行われたものといえる。

チベットの近代をいつからいつまでとするか、多くが納得しうる定説はチベット史研究においてまだ示されていないのではないかと。本論文における 13 世代の分析は、その時代を画するための一つの試みである。インドと中国という大国のはざまにおいて世界史上の近代といわば間接的に接しながら、それ以前とは明らかに異なる時代を迎えたアジアの一地域の様相を実例として提供すると同時に、チベットにおける近代化論の準備ができればと思う。

今回主に利用した史料は、ダライラマ 13 世著作集の中の 13 世の伝記、「ナムタル (rnam thar)」(DL13) である。13 世没後まもなく、13 世の師僧の転生者にあたるプルチョー・トゥブテンチャンパツァーティムテンジン (Phur lcog Thub bstan byams pa tshul khri ms bstan 'dzin, 1902–?) により書かれ、7 巻の著作集中、2 巻を占める。著作集にはそのほか各地での説法、布告、手紙などが含まれる。

(2) 13 世の亡命とその影響：仏教振興の決意

13 世は 1904 年から 1912 年までの約 8 年半、チベットを離れ亡命生活を送った。その原因は、中央アジアでの覇権においてロシアに遅れをとるまいとするイギリス、そしてイギリスのそうした動きに触発されチベットに対する宗主権の再強化を図る清朝が軍事的な圧力をかけてきたため、13 世は難を避けてモンゴルと中国、またインドへ向かった。

この経験は 13 世の後半生に大きな影響を与えるが、そのひとつが 13 世に改めて仏教振興への決意を固めさせたことだった。亡命先での見聞から 13 世はチベット以外の地で仏教が衰退していることを知り、仏教を復興し守っていかなければならないという使命感を強くしたのである (Tada 1965, 64)。

インドから戻ってまもなくの 1913 年 1 月 8 日、13 世はチベットの人々に向けて 5 か条の布告を発する⁽¹⁾。その第 1 条に次のようにある。

(引用 1)

この世界においてあらゆる場所に利樂が生じるもとは、この貴重な仏の教えが物心の供養を受けて長く存続することによっているので、〔これを護持することが必要である。そのためには〕ラサのトゥルナン ('Phrul snang)、ギャタラモチェ (rGyas ttab Ra mo che)、タンドウク (Khra 'brug)、サムイェー (bSam yas) などの聖地、三大寺など様々な宗派の全サンガへ布施し、〔それらの〕維持に努めなければならない⁽²⁾。

仏教振興への 13 世の決意を、この条項に見ることができる。

2 ダライラマ 13 世の宗教政策

(1) 内容

13 世がとった仏教振興策を、内容から見て大きく 3 つに分けることができる。便宜的に名称をつけると、経済的・学問的支援、僧院における規律の維持向上、仏教的伝統の維持である。

まず、経済的・学問的支援のうちの経済的支援とは、法要や日々の勤行で僧侶たちに提供される飲食物、布施金を負担するというものである。13 世はチベット暦 1 月と 2 月にそれぞれ行われる法要のモンラムチェンモ (smon lam chen mo) やツオンチュー (tshogs mchod) に飲食物を提供し、夏安居や秋の特別な法要などにも資金を出していた (Shakabpa 1986, 318)。学問的支援としては、仏教学位授与の適正化と顕彰を行った。それまでゲシェー位授与において試験の過程でしばしば不正が起きていたが、13 世はゲシェー位の既取得者たちを調べ、そのうちの一部が十分な学識を備えていないことをつきとめるとともに関係者を処罰した。三大寺の新任の学堂長や、ゲシェーの中でも最高位のララムパ (lha rams pa)、ツォクラムパ (tshogs ram pa) らにも試験を行い、順位に応じて褒賞した (Dung dkar 1997,

219)。その様子の一部がナムタルに次のように記録されている。

(引用 2)

モンラムチェンモやツォンチューにおいて、三大寺をめぐる教義問答を行う〔学習課程を経て〕主張命題を述べる者〔＝問答試験の受験者〕たちに、〔ララムパ、ツォクラムパなどの〕ラブジャムパ (rab 'byams pa) の諸称号をどう与えるかについては、それぞれの学習〔成果〕のよしあしをはかって正しく行われるべきことが、各寺院の寺規に記されている。しかしこの頃、理論や経典〔理解〕の程度に基づかず、好き嫌いに応じて与えがちであるなど、規律弛緩の悪習が生じている。よって、今後そのようなことを禁じる、という最終的な決定を〔ダライラマ法王は〕適切かつ厳しく下された。その上で甲子〔1924〕年のモンラム〔で選ばれた〕ララムパラを、法王ご自身のおられるところに近い御前に呼んで、五種の経典に優れ習熟した問答の立会人を同席させ、順に問答の試験をなさったところ、習熟の度合いの低い者が数名〔おり、彼らは〕うまく答えることができなかった。それで、〔そうした状況が〕主には大寺院の汚名〔となり、また〕、勉学を次第に衰えさせることになると懸念なかり、〔答えられなかった者の〕ララムパ〔の称号〕を剥奪し、称号を与えた寺院の師僧をしかるべく処罰した。そして、今後〔ララムパなどの称号を〕与える方法・次第を規則に違反することなく確実に行うように、という命令をお伝えになった⁽³⁾。

また、薬学と暦学を研究するメンツィーカン (sman rtsis khang) を作ったのも、学問支援の一環と考えられる。

13 世は僧院における規律の維持向上にも心を用いた。当時の僧侶らの生活や行動の乱れは、シッキム政務官チャールズ・ベル、河口慧海などによっても報告されている (Bell 1946, 199, 200–01; 河口 1978, 68–69)。そうした状況に対し 13 世は、たとえば 1924 年に三大寺に対して示した訓戒において次のように述べている。

(引用 3)

近頃、三大寺内で公私の別なく植物や花を栽培したり、馬やラバ、ディヤゾ、犬猫を飼育したり、清掃が行き届いていないなど、規律の乱れが高じている⁽⁴⁾。

13 世はこのように具体的状況を挙げると同時に、規律担当者呼びつけて嚴重注意を言いわたした。

13 世が特に力を入れたことの 3 つ目に仏教的伝統の維持が挙げられる。中でも寺院修復と経典開版には特別多くの精力と資材が注がれた。寺院建造物の維持修復は代々の為政者が行ってきたことの一つであるが、13 世もラモチェはじめ各地の寺院の修復作業をかなり頻繁に実施した。ナムタルにはポタラ宮やトゥルナン修復の詳細についての記事 (DL13, 217b, 231a など)、あるいは官僚をトップに各種職人を含む修復チームが結成され現地に向けて出発した、といった記事がしばしば見られる (DL13, 195b4 など)。また 13 世は諸宗派の稀観経典の開版および古い版木の修復再生にも熱心に取り組んだ⁽⁵⁾。中でも特筆すべ

きは、カンギュル (bka' gyur) を新たに板行したことである。13 世はその事業に私費を投じ、また膨大な經典 1 枚 1 枚に目を通して間違いを正した (Bell 1946, 294-95; Tada 1965, 65-67)。ポタラ宮のふもとに版木保管庫を設け、その完成時に盛大な式典も行った。この經典は完成後、「ラサ版カンギュル」と呼ばれることになるが、それについてナムタルが次のように記す。

(引用 4)

〔ダライラマ法王は〕仏菩薩たちが加持したおかげと、観音でありながらえんじ色の衣で現れる者〔=ダライラマ〕の発心の及ぶ範囲が広大であり施しを惜しまないおかげ、事業〔=カンギュル開版〕全過程の方便の巧みな行い、よい思し召しにより、事業を鼓舞し、完全なる多数の支分が集まったことにより、15 年ほどの間に全有情の一時的および究極的利樂の正しい根本である福分を無比にたやすく完成なされた⁽⁶⁾。

(2) 背景と意味

まず経済的・学問的支援について述べると、為政者が僧院に対し経済的支援を行うのは、チベットに仏教が本格的に導入された 8 世紀にさかのぼる慣行である。チベット初の出家者が誕生した時、吐蕃王国のティソンデツェン王 (Khri srong lde btsan) が、それら出家者の納税と兵役の免除、および彼らの生活費を国庫から負担することを決めた (Dung dkar 1997, 510, 513-16)。学問分野への支援については、学僧の修道秩序を正し、彼らの意識および学問水準の向上に役立てようとしたものと考えられる。これら経済的支援と学問分野への支援は、13 世が吐蕃王以来の伝統に沿って政教二元の長の役割を果たしたものといえる。

僧院の規律を引き締めるための 13 世の厳しい姿勢は、同時代を生きた複数のチベット人の証言から判断するに、確かに成果を収めたようである⁽⁷⁾が、僧院においては規律が存在意義に関わるという点でとりわけ重要であると考えられる。つまりサンガは戒律を守ることによって清浄に保たれ、そこから超俗性が生まれ福田となりうる。それによって人々の供養を受けることができる (石井 1975, 第 1 章)。もし清浄でなくなれば、超俗性とともな福田としての機能が失われ供養も失い存続できない、ということである。先に挙げた 5 か条宣言にあるように、仏教を護持しようとするならばそれを担うサンガを正しく維持することが必要だと 13 世は認識していたのであり、そのためにサンガ成員の持戒、規律維持が欠かせないという認識を持っていたものと考えられる。それはサンガを本来あるべき姿に戻そうとするものと理解することができる。

13 世により修復された寺は、Shakabpa (1986, 318) に 20 余か所が挙げられている。これらはそのほとんどが祖孫三法王、すなわちソンツェンガンポ (Srong btsan sgam po)、ティソンデツェン、ティレルパチェン (Khri ral pa can) にゆかりのある場所である。20 余のうちの一部は引用 1 に挙げられているものと同じで、トゥルナンはソンツェンガンポの菩提寺であり⁽⁸⁾、ギャタラモチェは唐から輿入れした同王妃の文成公主が、またタンドウクを含む鎮肢四寺院と再鎮肢四寺院⁽⁹⁾はソンツェンガンポが建立したものである。チベット初の僧

院サムイェーは、ティソンデツェンが建てた。ダライラマ 5 世 (rGyal dbang lnga pa Ngag dbang blo bzang rgya mtsho, 1617–1682) は生前ソツェンガンボ王にちなんだ行動をとり、同王が実現したとされる政治理念、すなわち仏教と政治の「二規を通じて教えと有情の利益をはか」り、「仏法と王法をともに行う」ことを実践することにより支配権を強化したとされる (石濱 2001, 第 3 章)。数千あったというチベット各地の寺院の中から 13 世が上述の諸寺を選んだ理由も、それらが単に伝統ある歴史的遺産だからということではなく、今述べたような三法王にまつわる縁起と無関係ではないと考えられる。

また、カンギュル開版の意図にも三法王が関係していたとみられる。

(引用 5)

偉大な先達たちと祖孫三法王が仏の〔言葉である〕カンギュルを、金泥や銀泥、朱泥により書いた無限の〔価値を持つ〕経がある⁽¹⁰⁾。

ナムタルのこの一節から、カンギュルが三法王と結び付けてとらえられていたことがわかる。

3 13 世宗教政策の性質

(1) 過去の踏襲

仏教振興をめざした 13 世による施策は、政教の長としての伝統的な役割を果たしながら、サンガや僧侶の本来あるべき姿を求め歴史上の先達に倣おうとする、いわば過去に範を求めるやり方だった。これは決して 13 世代に特徴的なものではなく、代々の為政者がとってきた方法だった。しかし、それらが一定の成果を収めたからこそ、13 世を偉大と評価するひとつの要因になったと考えうる。

13 世が亡命から戻りこうした政策を始めたのは、チベットにとってまさに新たな時代が始まろうとしていた時期である。清朝との関係に終止符を打つことで事実上の「独立」を果たすと同時に、長い不在期間をへてようやくダライラマの帰還が実現した。しかも海外での見聞を積んだ彼の胸中にはチベットを国際社会に仲間入りさせると同時に、チベットがかつて経験したことのない近代化を行おうという抱負があった。そのような、おそらくは新時代の始まりを感じさせる空気の中で、13 世があくまで過去から継承されたものを重視する仏教振興策を行ったのはなぜか。たとえば新たに寺院を建立したり、政治や社会面での近代化と足並みを揃え、新しい時代に対応した仏教の姿を模索したり、あるいは亡命中の見聞で仏教が衰えていることを知ったチベット以外の国や地域に再び教えを広めるといった、いわば「発展型」の政策をとらなかったのはなぜなのか。次にその点を考えてみたい。

(2) その要因

理由の一つとして、チベット内部に改革への指向がなかったか、あったとしても非常に限定的だったのではないかという点が考えられる。チベット人は自分たちが守り奉じてきた仏

—ダライラマ 13 世 (1876-1933) の宗教政策—

教こそインドから直接受け継いだ正しいもの、という自負を持っていた。仏教の正統な継承者を自任するそうした姿勢からは、今ある仏教の形式や方法を変えようという自発的かつ積極的な必要性は生まれにくいだろう。チベットでは前例を重視する傾向があり、それも「新しさ」を指向しない傾向を助長したのではないかと考えられる。

チベットをとりまく国際環境にも、チベットにおける革新を促す動きは見られなかった。中華民国はかつて清朝が発したダライラマ廃位の宣言を撤回し、チベットが中国に属することを認めるよう求めてきたが、国内の混迷によりそれ以上積極的にチベットに関与しようとはしなかった⁽¹¹⁾。インドの宗主国イギリスも政府の方針としては、1世紀ぶりに訪れたロシアとの勢力均衡をあえてくずしてまでチベットに関わろうとしなかった。こうした姿勢は、キリスト教や共産主義などの勢力や思想活動もチベットから遠ざけることになった。

これら 13 世にとっての外的要因のほかに、13 世自身の立場に起因する要素が考えられる。13 世は亡命により長らくチベットを不在にする間に、清朝という後ろ盾を失った。清朝はチベットの「独立」を阻む存在であると同時に、財政的支援者にして形式的には称号や印璽の授与者でもあった。13 世不在中には駐蔵大臣により、13 世を除いたチベット政府新体制樹立が図られたこともあった。しかし、チベット仏教が信仰される領域内でダライラマが信仰世界の頂点に立つという理論は、少なくともチベットにおいては効力を失っていなかった。それは彼が表立った反対を受けることなく亡命前の地位に戻ったことから明らかである。よって 13 世としてはそうした理論や構造をそのまま利用し、亡命以前の秩序を再生・強化すればよいのであって、そこに変革を求める必要がなかったのではないかと考えられる。

その一方で実際には、13 世の立場は決して安定したものではなかった。亡命からの帰還に先立って、それまでチベットに駐在していた清朝の大臣初め中国人の官僚や兵士をチベットから一掃したものの、国内には 13 世不在中に中国に協力したチベット人官僚や僧侶ら親中派がいたし、ダライラマ亡命後ラサに乗り込み、中国やイギリスと独自に関係をもとうとしていたパンチェンラマの存在もあった。また、必ずしもダライラマの意向に従わない僧院も無視できない力を持っていた。13 世はこうした諸勢力との均衡を探りつつ、近代化を含む諸政策を進めていったのであり、彼が革新的な宗教政策を行おうとしても、支持を期待できる強い基盤を持っていなかったのではないだろうか。そのような状態では、近隣地域での共産主義の勢力拡大を懸念しつつも、積極的な対策を講じることがむずかしかつたのではないかと考えられる。

4 おわりに

このように、13 世による政治・社会面の近代化と仏教振興策との間には、当初から相容れない方向性が内包されていた。近代化と仏教振興、それぞれの政策が進められその成果が現れれば現れるほど、社会の一部に反発が生じ、それが直接 13 世の葛藤にもなったと考えられる。最終的に 13 世は政治・社会面の近代化を中断する決断をした。それにより、チベッ

—ダライラマ 13 世 (1876–1933) の宗教政策—

トを近代社会に押し上げる原動力となりえたはずの諸政策は、成功を見ずに終わることになった。従来の研究では近代化不成功の理由を、守旧派の僧侶や官僚らの反対によるものとしている。しかし、それだけでは不十分ではないだろうか。ほかでもない 13 世自身における相克こそが、もっとも本質的な原因だったと考えられる。

最後に今後の課題を簡単に述べる。本論文で使用したナムタルを含むダライラマ 13 世著作集は、ナムタル以外の史料を多く含んでいるが、今回それらを活用することができなかった。他者により編まれた伝記にはない 13 世の肉声に近いものが、たとえばチベット内外の人たちに宛てた書簡や、モンラムにおける説法などに残されていることも考えられる。決して網羅的とはいえない 13 世著作集の欠落部分、および政治的理由により史資料へのアクセスが困難な現状を補填するために、インドで記録されたものを含め他の言語の史資料を求めていく必要がある一方で、やはり 13 世代の研究にこの著作集の持つ役割の重要性は軽視すべきでないを考える。

また、本論文においては 13 世代のみを扱ったが、チベット史の中で一点を浮かび上がらせるためには、そこをより長い時間の中に位置づけてとらえる必要があるのはいうまでもない。それは歴代のダライラマという別々の人物が「転生者」としてつながっており、理念上ではまったく別の存在ではないという特徴を持つために、いっそう重要性を増す。13 世以前の時代を視野に含めることで、13 世代の持つ近代的特質がより鮮明に浮かび上がってくるものとする。

略号表

文史資料 *Bod rang skyong ljongs srid gros lo rgyus rig gnas dpyad gzhi'i rgyu cha u yon lhan khang.* Bod kyi lo rgyus rig gnas dpyad gzhi'i rgyu cha bdams bsgrigs. (2. sPyi'i 'don thengs 11pa). Mi rigs dpe skrun khang, 1989.

DL13 *Phur lcog yongs 'dzin skye ming 'dzin pa Thub bstan byams pa tshul khriims bstan 'dzin (1902?-).* *lHar bcas srid zhi'i gtsug rgyan gong sa rgyal ba'i dbang po bka' drin mtshungs med sku phreng bcu gsum pa chen po'i rnam par thar pa rgya mtsho lta bu las mdo tsam brjod pa ngo mtshar rin po che'i phreng ba zhes bya ba'i glegs bam smad cha bzhugs so.* Reprinted. In *The Collected Works of the XIII Dalai Lama.* (Śata-piṭaka Series Vol. 288a). New Delhi: International Academy of Indian Culture, 1982.

文献表

Bell, C.

1946 *Portrait of the Dalai Lama.* London: Collins.

Dhondup, K.

1984 "The Thirteenth Dalai Lama's Experiment in Modern Education." *Tibet Journal.* Vol. IX, No.

—ダライラマ 13 世 (1876–1933) の宗教政策—

3, pp.38–58.

1986 *The Water-Bird and Other Years: A History of the 13th Dalai Lama and after.* New Delhi: Rangwang Publications.

Dung dkar Blo bzang 'phrin las.

1997 *Dung dkar blo bzang 'phrin las kyi gsung rtsom phyogs bsgrigs.* Pe cin: Krung go'i bod rig pa dpe skrun khang.

2002 *Dung dkar tshig mdzod chen mo.* Pe cin: Krung go'i bod rig pa dpe skrun khang.

Goldstein, M. C.

1989 *A History of Modern Tibet, 1913–1951: The Demise of the Lamaist State.* Berkeley: University of California Press.

石濱 裕美子

2001 『チベット仏教世界の歴史的研究』東方書店。

石井 米雄

1975 『上座部仏教の社会政治学：国教の構造』創文社。

河口 慧海

1978 『チベット旅行記』第三巻、講談社学術文庫、講談社。

劉 曼卿

1986 『女性大使チベットに行く』岡崎俊夫・松枝茂夫訳、白水社。

ムリン、G. H.

2006 『14人のダライ・ラマ——その生涯と思想——』下巻、田崎國彦・渡邊郁子・クンチョック・シタル訳、春秋社。

小野田 俊蔵

1989 「チベットの学問寺」『チベット仏教』(岩波講座 東洋思想 11) 長尾雅人ほか編、岩波書店、pp.351–373。

Phreng ring Rin chen sgrol ma.

2000 *Bod kyi bu mo.* (Oral History Series No. 11). Dharamsala: Library of Tibetan Works and Archives.

Phur lcog yongs 'dzin skye ming 'dzin pa Thub bstan byams pa tshul khriims bstan 'dzin

1981 *lHar bcas srid zhi'i gtsug rgyan gong sa rgyal ba'i dbang po bka' drin mtshungs med sku*

—ダライラマ 13 世 (1876–1933) の宗教政策—

phreng bcu gsum pa chen po'i rnam par thar pa rgya mtsho lta bu las mdo tsam brjod pa ngo mtshar rin po che'i phreng ba zhes bya ba'i glegs bam stod cha bzhugs so. Reprinted. In *The Collected Works of the XIII Dalai Lama.* (Śata-piṭaka Series vol. 288). New Delhi: International Academy of Indian Culture.

Shakabpa.

1986 *Bod kyi srid don rgyal rabs.* (vol. II). Dharmasala: Tibetan Cultural Printing Press.

スタン、R. A.

1993 『チベットの文化』決定版、山口瑞鳳・定方晟訳、岩波書店。

Tada, T.

1965 *The Thirteenth Dalai Lama.* Tokyo: The Center for East Asian Cultural Studies.

多田 等観

1999 『チベット滞在記』新装版、白水社。

Tshe ring dpal 'byor.

1992 “rGyal dbang sku phreng bcu gsum pa'i mdzad pa dang/ de las 'phros pa'i lo rgyus kyi bsalab bya 'ga' zhig skor gleng ba.” *Bod ljongs zhib 'jug*, pp.38–53.

山口 瑞鳳

1989 「チベット仏教思想史」『チベット仏教』(岩波講座 東洋思想 11) 長尾雅人ほか編、岩波書店、pp.21–115。

2004 『チベット』下巻改訂版、東京大学出版会。

注

- (1) 発布の日付は Shakabpa (1986, 219) による。チベット暦によると考えられる。DL13 の同日およびその前後のか所では、これについて触れていない。
- (2) 'jig rten gyi khams 'dir phan bde ma lus pa gang las byung ba'i gzhi rtsa rgyal ba'i bstan pa rin po che 'di nyid rnyed dang bkur sti bcas te yun du gnas pa la rag las pas na/ lha ldan ra sa 'phrul snang dang/ rgyas btab ra mo che/ khra bsam sogs gnas chen khag dang/ gdan sa gsum sogs ris med dge 'dun gyi sde mchis so cog tshang ma'i mchod rgyun dang/ 'dzin spras la do dam lhod med dgos rgyu/ (Shakabpa 1986, 221)

13 世スンプムにこれと同じものは見出せなかったが、DL13 等をもとに編纂されたと思われる文史資料には 5 か条が抄録されている (文史資料, 217–18)。また Goldstein (1989) には抄訳が掲載されている (Goldstein 1989, 60–61)。なお、Shakabpa はこの 5 か条の布告がチベットでは「独立宣言」とみなされていると述べている (Shakabpa 1986, 219)。

—ダライラマ 13 世 (1876–1933) の宗教政策—

- (3) lha ldan smon tshogs gnyis su grwa skor dam bca' 'jog mi sogs rab 'byams pa'i ming btags che chung gang sprod rang rang gi slob gnyer legs nyes la dpags pa'i sprod lugs tshul bzhin dgos tshul gdan sa so so'i bca' yig tu gsal yang/ bar lam rigs lung bzang zhan gyi stangs 'dzin med par dga' mi dga' thog gi sprod bde byed pa sogs sgrigs lad chu ngan lam shor ci rigs shig shar bar brten/ phyin chad de rigs mi chog pa'i rgyas bcad mtha' sdom 'thus nan bskyangs thog/ shin byi smon lam lha rams pa mams gong sa skyabs mgon chen po gang nyid bzhugs yul dang nye ba'i mdun sar bka' 'gugs dang 'brel bka' pod lngar mkhas shing byang chub pa'i rtsod dpang nye bar bzhag ste rtsod rgyugs rim bzhin bzhes par goms pa chung ba re zung nas brgal lan ji bzhin ma thebs stabs gtso bor gdan sa'i mtshan shas dang/ 'chad nyan la'ang rim lad yong bar dgongs lha rams khongs nas phyir 'then dang/ ming btags sprod mi chos sde'i slob dpon par babs mtshungs kyi bka' nyes stsal te slan chad sprod lugs kyi rim pa bca' sgrigs dang 'gal med drang 'brel dgos rgyu'i bka' bsgyur gnang/ (DL13, 231b4–232a3)
- (4) bar lam chos sde chen po gsum gyi nang du spyi sger bye brag med par rtsi shing me tog 'debs spel dang/ rta drel 'bri mdzo nyar ba/ khyi dang byi la bsten bskiyil/ gtsang sbra 'dzin spras chung ba sogs sgrigs lad ngan shas je 'phel gyis… (DL13, 246a6–b5)
- (5) 次に述べるカンギュルのほか、プトウン・リンチェントウ全集 28 巻など (Tada 1965, 65–66)。
- (6) rgyal ba sras dang bcas pa mams kyi byin gyi rlabs chen po'i mthu dang/ rnam 'dren phyag na padmo ngur smrig gar gyi rnam par rol pa gang gi thugs bskyed 'jug pa rgya che zhing/ gtong ba la mchog tu ma zhum pa'i mthu dang/ las byed snga bar phyi gsum gyi thabs la mkhas pa'i spyod pa dang/ lhag pa'i bsam pa bzang pos las la gzhen bskul gyi mngon sbyor dang bcas pa phun sum tshogs pa'i yan lag du ma tshogs pa la brten nas lo bcu phrag phyed gnyis tsam gyi khongs su lus can thams cad kyi gnas skabs dang mthar thug gi phan bde'i rtsa lag dam pa bsod nams kyi bgo skal mthsungs pa med par bde blag nyid du grub bo/ (DL13, 244a3–5)
- (7) 「[13 世は] 三大寺をはじめとする各宗派のすべてのサンガの、各派の規律、行動を正すとともに、寺規を定めた」(Shakabpa 1986, 318) ; 「[13 世は] 公法に大変配慮し政治方面全般と、特に僧院の教化、規律をしっかり管理しておられた」(Phreng ring 2000, 173) ; 「三大寺をはじめとする諸寺の規律を厳正にするとともに、三大寺での教育に従前以上に注力し、罪ある者は処罰し、功績ある者には褒賞を行った。そのため諸寺の規律および学習の発展を促した」(Dung dkar 2002, 691)。
- (8) 一般的な伝承では、トゥルナンはソンツェンガンポ王のネパール人妃が将来した仏像を納める寺として建立したとされるが、山口瑞鳳はこの説をとっている (山口 2004, 334)。
- (9) チベット人が持つ国土感によればチベットは魔女が仰臥した形をしており、それを調伏するという目的で 8 つの寺が建てられた。各寺が魔女の体の 1 か所をおさえこむ釘の役割を果たすとされる (スタン 1993, 25)。鎮肢四寺院、再鎮肢四寺院という訳語は石濱 (2001) による。
- (10) sngon byon gyi dam pa gong ma mams dang/ chos rgyal mes dbon sems dpa' chen po mams kyi rgyal ba'i bka' 'gyur ro cog gi glegs bam gser zhun ma dang/ dngul sogs rin po che dang/ mtshal snag gi ri mo'i lam du drangs pa mtha' klas pa mchis… (DL13, 240a4–5)
- (11) 蒋介石や陝甘総督による小規模な使節の派遣は数回行われた (劉 1986; DL13, 180a1–b1)。